

円徳寺『教行信証』に学ぶ会 第四回（令和二年六月十一日）

講師 延塚知道先生

《一席》

はじめに

こんにちは、久しぶりにこういう場に立たせていただきました。三月の半ばくらいから一切中止になりまして、本山・各別院をはじめ、大きな会は全部中止になって、それに伴って地方の研修会も中止になりまして、四、五、六とほぼ三か月、三か月の間、久しぶりに生まれて初めて、それだけ休ませてもらいました。二月に来た時に申し上げましたけれども、安居の講本を二月に書き上げて、しかし、あれはまた印刷に出しますと初稿、二稿と戻ってくるのです。戻ってくる、また手を入れますから、それが完成しまして、まあ、私はコロナに罹ったら死ぬと思っていましたので、その間に仕事をしようと思つて、それ以降に二冊本を書きました。

一冊は東本願寺から七月のはじめくらいに出ます。「親鸞の主著、『教行信証』の世界」という本を書きました。それはかなり厚くて三百五十ページと、かなり厚いものですが、基本的にはご門徒さんのために『教行信証』を書いたものです。そして東本願寺から「同朋」という雑誌が出ているのです。その雑誌に二年間連載したものを一冊にまとめて、そして書き直したものです。ですから七月に出ますので、この次の会くらいには間に合うことになります。もし、本格的に勉強をしたかったら、また続けてお聞きになってくださる方は、話はすぐに脱線をしますから、何か違うところに行つてしまうから、かえつて本を読んでいただくか「あーなるほど、こういうことを言っていたのか」というふうにわかると思いますが、是非ともそれを

参考書にして読んでいただければと思います。

もう一冊は、高僧和讃の講義 道綽と善導のところですが、それを一か月くらいで書きました。四、五日前に書きあがって、それまで体調が悪くて、本を書くこと鬱になるのです。鬱になるとしんどくて、体が痛いのですが、書き終わったら少し楽になりました。

今日は、久しぶりに話をさせていただくということで、ぼくもうれしく思っております。

先日は田畑先生の方から、先回のをテープ起こしをして下さって、ネットで送ってきて下さったのです。それで自分がしゃべったのを読むのは嫌なのですが、しかしまあ年ですから、忘れていたと思つて読み返してみました。本当にすみません、反省をしました。きちんと本を書くように、一つの筋を追いつながら、皆さんが分かるようにお話をしないといけない、あちこち思いついたところに話が行つてしまいますから、たいへんご迷惑をお掛けしたなあと思つて、これからは少し心を入れ替えまして、少し真面目にやろうと思っております。

なぜ念仏して救われるのか

ところで、これまでお話をしてまいりましたが、簡単に申し上げますと法然上人は『観経』に立つた仏教者で、特に『観経』は実践なのです。教理とか教学というよりも実践として、どうして仏さんの悟りを自分の身にいただくか、これが課題になっているのが『観経』です。ご存知のように法然上人は比叡山で何十年も勉強した方でした。天台宗、真言宗、その他の宗派は学問としては、教学としては完璧です。しかし皆さん少し勉強すると分かるでしょう。「今日の話はよくわかった」という時に、かえつて忘れられます。よくわかると理解できたように思いますが、仏様の世界は理解を超えているのですか

ら、わからないといけなけれども、わかるだけではほんとうに自分のものにならないという難しさがあるのです。

仏教を学ぶときに、法然上人はそれに何十年も悩んだのです。そして遂に比叡山を下りたのです。つまり学問としてなら何でも知っている。それでも自分が救われていないことが問題なのです。そういうたいへんまじめな求道心で比叡山を下りられて、そして実践として仏さんの悟りをこの身にいたたくというのは念仏しかない、これに遇われたのです。ですから『観無量寿経』はこれまで申し上げたように称名念仏、これを表に立てて説く經典になります。

ところがなかなか難しいところがありまして、先程皆さん一緒にお念仏をしました、その中で、ほんとうに仏教に救われている人は何人いるだろうか、ずつと見渡していたのですが、顔からだけでは分かりません。お念仏をしているという姿だけでは本物か偽物かはわかりません。そこに、今度はもう一つ別の問題が起こってきます。

お念仏で救われるというけれども、なぜ、そんなにお念仏が大切なのか、お念仏も、修行の念仏もあれば、法然や親鸞聖人がお説きになるような本願の念仏もあります。それから時宗の念仏もあれば、天台宗や真言宗などの念仏もあります。そういう念仏ではなくて本願の念仏。だから法然が「南無阿彌陀仏を称えて救われる」というけれども、それは本願に救われる。法然上人もそう言うでしょう「ただ念仏して、弥陀に助けられまいらすべし」。もう少し言葉を付け加えると、「ただ念仏して弥陀の本願に助けられなさい」ですね。

ですから、なぜ凡夫が凡夫のままに救われるか、というのは、本願をどのように受け止めているか、それにかかわってくる。修行もしないで、凡夫が凡夫のままに救われるということはどう考えてもあり得ない、そのあり得ないことを本願の方から救ってください。

親鸞聖人は法然上人と別な事をおっしゃったわけではないのだけれども、法然上人が念仏を表に立てたの対して、親鸞聖人は裏から信心に立つて本願の道理を明らかにしていく、これが『教行信証』の使命なのです。分かりますね、もういろいろ申し上げなくてもわかるでしょう。

今の世の中で、テレビなどでコロナで騒いでいますが、その中で念仏のひとつも言ってくればいいのにも思いますが、そんなことを言っている人は一人もいませんね。だれも念仏なんか信じていない、だれも念仏で救われるなんて思っていない。それは「なぜ救われるか」ということが分からないからです。なぜ救われるかという道理、理由を『教行信証』の方で明らかにしていく、これが親鸞聖人の『教行信証』の一番大きな理由になるのです。

法然の『選択集』があるにもかかわらず、親鸞聖人があらためて『教行信証』を書かなければならなかった理由は、今と同じ状況があったからです。誰も念仏なんか信じていない、それどころか、「念仏は凡夫のための方だ」という批判の書きえ出たのです。それを受けて親鸞聖人は『教行信証』を執筆することになります。ですから親鸞聖人の『教行信証』は、なんととっても『大経』の本願に立つて、その本願の道理を公開していく。これが親鸞聖人の『教行信証』の特徴になります。

ひよこ 標拳

それで今日は、少しずつ『教行信証』の中に入れていきましょう。まず、「顕浄土真実教行証文類序」として、『教行信証』全体の序が説かれます。これは普通全体の序ですから「総序」と言われるところ
です。

ところがこの総序が終わりますと、『教行信証』全体は『大経』、本

願の論書ですから、まず標拳ひょうけんというのがあります。これは今で言えば「目次」とか「見出し」に当たるものです。総序が終わつてすぐに「大無量寿経 真実の教 浄土真宗」という標拳があります。そして教の巻が始まりますから、この「大無量寿経 真実の教 浄土真宗」という標拳・見出しは、当面は教の巻の見出しだと考えられます。ところがその後「顕真実教」「顕真実行」「顕真実信」という全部の巻の名がわざわざあげられています。

ですから、『大無量寿経』というこの経典(の名)は、一つは「浄土真宗」という意味では『教行信証』全体の標拳になります。だから『教行信証』の各巻を後に記載している。『教行信証』は『大無量寿経』に基づいているのですから、当然、こういう体裁をとっているのです。広く言えば『教行信証』全体の標拳になる、という意味をここに託していると思われれます。

もうひとつの「真実の教」という意味からすれば、これは「教の巻」の標拳です。一ページ開いていただきますと、次に「顕浄土真実教文類一」が始まりますから、『大無量寿経』というのには直接的には「教の巻」の標拳です。

「教の巻」が終わりますと、今度は「行の巻」が始まります。聖典で百五十六ページ、そこに「諸仏称名の願」、これは第十七願、これが「行の巻」の標拳です。

「行の巻」が終わりますと、今度は「信の巻」です。「信の巻」の標拳は「正信偈」が終わりますと、聖典二〇〇ページ。この「信の巻」だけは、「信の巻」だけの序が付いています、それを総序に対して「別序」といいます。「正信偈」があつて「別序」が述べられています。その後、標拳は「至心信樂の願」が挙げられています。ですから「信の巻」は第十八願の内容について明らかにしている、「行の巻」は第十七願、諸仏称名の願について明らかにしている、こういう意味で

す。

それから「信の巻」が終わりますと、今度は「証の巻」ですけれども、ここに第十一願、必至滅度の願があげられます。この「証の巻」は、教・行・信・証と説いてきて、まともに巻になりますので、往相回向の『教行信証』が説き終わると、284ページ、ここに「それ真宗の『教行信証』を案ずれば、如来の大悲回向の利益なり」とあります。聖道門の仏教は衆生の修行によって悟りを得るけれども、浄土真宗の『教行信証』という悟りは、如来の回向による利益りやくであり、仏の方からいただくのです。こちら側の「できがよいとか悪い」、「努力が足りるとか足りない」というようなことは何の問題にもなりません。「如来の本願」を信じることによつて、本願の方から開かれてくる利益、と言うふうに申し上げます。

そして、「かるがゆえにもしは因もしは果」、信心としての「因」と如来の悟りの「果」は「一事として、阿弥陀如来の清淨願心の、回向成就したまえるところに、あらゆることあることなし」。因の信心が本願力回向の信心なのだから、その信心に仏の彼の浄土が開かれている。これはあたりまえのことです。「知るべしとなり」これで終わるのです。

そして今度は「二つに還相の回向というは」と、還相の回向が始まつていきます。還相の回向というのは「これ利他教化地の益なり」仏様の悟りを覚つて、そして他を利益するという。そういう仏様の境地、それを利他教化地という。

そこから「これ『必至補処の願』より出でたり、また『一生補処の願』と名づく。また、『還相回向の願』と名づくべきなり。『註論』に願われたり、かるがゆえに願文を出ださず。『論の註』を披くべし」と言つて、ここからずっと還相回向の論述が始まつていきます。これは標拳ではありませんが、第二十二願の「還相回向の願」があげら

れています。

そして「証の巻」が終わりますと「真仏土の巻」になりますから標拳を見てみましょう。「第十二願 光明無量の願」、「第十三願 寿命無量の願」、この二つの本願が標拳にあげられている。

次に、「真仏土の巻」が終わりますと、最後は「化身土の巻」です。ここに第十九願、「至心発願の願」、それから第二十願「至心回向の願」、この二つの願が標拳にあげられます。

真仮八願―『教行信証』で取り上げられている本願

「教の巻」に『大無量寿経』、(これが教の巻の標拳であり、全体の標拳です)

各巻に、

信の巻は、第十八願の至心信楽の願

行の巻は、第十七願の諸仏称名の願

証の巻は、第十一願、必至滅度の願

そして(標拳ではありませんが)

『教行信証』の中に還相回向が取り上げられています。

真仏土の巻は、第十二光明無量の願と第十三寿命無量の願、

化身土の巻は、第十九至心発願の願と第二十願の至心回向の願

(これは自力を表す願です)

したがって親鸞聖人が『教行信証』の中で取り扱う本願は、諸仏称名の願、至心信楽の願、必至滅度の願、還相回向の願、光明無量の願、寿命無量の願、この六つが真実の願です。

そして今申し上げました自力方便の願があります。私たちはだれ一人として自力で生きていない人はおりません。ですからその自力

で生きている私たちを「自力を尽くして頑張りなさい」と励まして、そして「自力では救われないよ」ということを教えてくださる願、これが第十九願「至心発願の願」と、第二十願「至心回向の願」です。これは方便の願です。「真実六願」と「方便二願」これを「真仮八願」と言います。

これから皆さんと一緒に『教行信証』を読んできますけれども、各巻の標拳になる本願、そして方便の願としてあげられている二つの願、すべて合わせて八つの願しか、親鸞聖人はその中で取り扱っていないこととなります。

『大経』は四十八の本願が説かれていますから、本当は『教行信証』も四十八の本願があつていいわけです。ところが親鸞聖人はこの八つの本願しか取り上げていない。それはなぜなのか。大いなる問題です

もし親鸞聖人が自分勝手な感覚だけで選んだとしたら、『教行信証』は優れた宗教的、天才的な人の書物になってしまう。私は学生の頃から「そんなはずはない、なんでかな」ということに悩み、苦勞してきました。

また、これは改めて少しずつ触れていかなくはなりません、今、申し上げたいのは、この八つの本願だけは『大経』の中に本願の成就文が説かれているのです。

今日は後半に『大経』の本願と、本願の教えを、皆さんに分かるように尋ねていきます。

『大経』の上巻―救いは浄土にある

『大経』の上巻は、法蔵菩薩が世自在王仏と出会って「一切の人を救いたい」と四十八もの本願を建て、その本願が実現する浄土を建

て、そして「皆さんが救われる場所はこの浄土しかありませんよ」と説いている。それが上巻です。

皆さんはどう思いますか。そんなふうに言われても、最近テレビを見ていても「天国、天国」という。あれは頭に來ます。みんな「天国」と言う、あれはキリスト教の言葉で、仏教の伝統的な言葉は「浄土」です。いのちを与える浄土に帰る、浄土が私たちの故郷であり、浄土に帰ればどんな人とも俱会一処、会える、そして浄土は比べる必要のない世界で、煩惱の届かない世界です。それが私たちの救いなのだと言われているのです。

けども「それがどうしたのだ」と。私たちは「自分の救いが浄土だ」と言われても、それさえ信じられないのです。まず、信じられるのは「自分」だと思つています。自分の「命」と、このある「自分」を確かなものだと思う。そしてこの世の中でできるだけ安らかに生きていこうと思う。そのためにはまず金が必要、それから人に押さえつけられるのは嫌だから権力や政治力を付けたい。名誉や地位を身につけて、この世の中を過ごしやすく生きたい。これが私たちの本音です。だから、そういうものに「救いは浄土にあるよ」と言われても、なかなかそれが信じられない。それが実情だと思います。けれども、これは仏様がそう言っているのです。

もうちよつと言つたら、年をとつてふらふらになつて、もう死ぬ頃になつて、コロナに罹つて死にそうになつて「地位も名誉もいるか」「もうなんにも要らない、さて、どうしてくれるんだ」というのが人間の最後です。その時に念仏を称える、これが『観経』の教えです。それによつて「根源的に人間が求めていたものは浄土に生きる、生まれることなのだ」ということが分かるのです。

ですから、仏様は「救い」が分からない私たちに、「救いとは何か」ということを教えているのが「浄土」だと考えてもいい。結局、私た

ちは欲望の延長で生きています。皆さんはどうですか、僕はそうだと思います。自分の思い通りになつたらそれが一番いい、思い通りにならないと鬱病になる。

私は本を書くときは鬱になるのです、ずっと殻の中に籠つていくでしょう。それが開かれる世界を一生懸命書いていくのですが、実際はものすごくプレッシャーですから、鬱になる。やはり何とか思い通りにしたい、そして自分の欲望が満たされる世界がほしい。これが「身」がそう言っているのですから、どうにもなりません。

お釈迦様は「あなたたちの救いは浄土なのだ」と言われている。それは今わからなくても結構です。必ず分かる時が來ます。分からないで死んだら幸せかもしれません。だけど閻魔さんの所に行かなくてはなりません。そこで「どうやって生きてきたか」と鏡の前に立たされる。あれは本当ですね、

私は最近死ぬことばかり思う、そうすると若い頃にしてきたことをいろいろ思い出すのです。「あんなことを言わなければよかった」とか、私は「あの時一生懸命に言ったが相手は傷ついたらどうな」とか、そんなことばかり思うのです。長生きしていると、生きて年をとると、少しずつ自分のことが分かってくる、そうするとこれは地獄だなあと最近思います。

そんなふうには『大経』の上巻は、わかってもらわなくても「一切衆生の救いは浄土にある」これが説かれているのです。その浄土が建てられた本願が四十八並べられています。

韋提希の救い

前に申し上げたかもしれませんが、『観無量寿経』の中で「韋提希

が救われる」という個所が、何か所かあるのです。

まず定善十三観のところと言うと、第七華座観で韋提希の救いが説かれていきます。

「仏、阿難および韋提希に告げたまわく」

お釈迦さんが阿難と韋提希に次のように言われた。

「あきらかに聴き、あきらかに聴け、善くこれを思念せよ」

よく聴きなさい、今から説くことをよく聴きなさい、と。ですからここは大事だということになります。そして

「仏、当に汝がために苦悩を除く法を分別し解脱したもうべし」

苦悩から救われる法をこれから説くからよく聴きなさい、と。

なぜかという、韋提希は自分の息子が父親を殺す。そして家庭内暴力で父親が殺されて、自分も殺されるような目にあうのです。もうこんな苦しい世界は嫌だと、だから苦しい世界から解放される世界を説いてくれとお釈迦様に訴えて説かれるのが『観経』です。

第七華座観まで来て「あなたが求めている苦悩を除く法を説くから善く聞け」と言つて、ここから説かれるのです。だから、この第七華座観というのはとても大切なところなんです。そして

「この語を説きたもうとき」お釈迦様がそう言った時に、

「無量寿仏、空中に住立したもう」阿弥陀如来は、空に立つておられた。そして

「観世音・大勢至、この二の大神、左右に侍立せり」

観音と勢至を従えて、阿弥陀如来は空に立つておられる。

そういう相を韋提希が見るわけです。

真宗の御本尊は立っているでしょう。あれはこの「住立空中の仏」、これを形にしたものです。忙しいから立っているのではない。よく見てごらんください、左足が前に出ているから。僕らがあまり言

うことを聞かないものだから、浄土を見ても知らん顔をしているから、だから阿弥陀さん忙しいから立っているのです。浄土宗の阿弥陀さんは座っています。やはり浄土宗の人たちは偉いのです。僕らは馬鹿だから、阿弥陀さんの方が忙しいから立っているのです。そして観音と勢至を従えて立っているのです。こういう相が説かれま

不請の友

これは解説をしすぎたらいけないですが、韋提希はさっき言った悲劇の中で最初苦しむのです。そして泣きわめくでしょう。「こんな世界は嫌だ、こんな苦しい世界は嫌だ」と言つて叫ぶでしょう。そして韋提希は「お釈迦様は来てほしくない」と言うのです。阿難と目連は私の友達だから慰めてくれる。だから「お釈迦様は来てほしくない、阿難と目連を呼んでくれ」と言うのです。これもよく人の心を読んでいる教えだと思いませんか。

人間は、最後まで自分が否定をされることを好まないのです。皆さんは一生懸命に聞いてくださるからいいですが、半分以上の人が寝てごらん、私はどうしようかと思つて、今日帰つて寝られませんか。本当ですよ、皆さん笑っていますが、ちよつと人から悪口を言われたくらいで一晩中寝られないことがあるでしょう。私を否定せずに「元氣だしなさい、大丈夫だから」と言つて慰めてくれる人を求めている、これが人間の本性です。

だから「目連と阿難をつかわしてくれ、お釈迦さんはいらぬ」と、お釈迦さんは全否定するから。だから「不請の友」と言うでしょう。仏教を聞く耳を人間は最初からもっていないのです。自分が否定されるような教えはいやでしょう。だからお釈迦さんは要らないと言つた。ところが不請の友というでしょう。要請をしないにお

釈迦さんの方が「馬鹿なことを言うな、慰めくらいで人が救われるか。お前このままいくと自殺をするぞ」と言つて、お釈迦様の方が耆闍掘山から飛んでくるのです、『観経』にそう書いてある。

「阿難と目蓮を連れて空を飛んで王舎城まで来る」と書いてある。

松原祐善先生―自由な人

インドに行くと、耆闍掘山に登るのに、ビンバシヤラロードと言つて大きな道もあるが、横に小さな道のみたいなのがあるのです。僕らはそれを見て、お釈迦さんは近道して行つたのだと、そんな不埒なことをいつも言うのですが、そうではなくてお釈迦様の教えは時間や空間を超えているのです。そういう意味で最初から飛んで出て来るのです。

皆さん、これまでの人生の中でのことをよく考えてみてください。自分がどんな時に感動したか。

お釈迦様（国王）は世自在王仏に遇つた。言葉でうまく言えないけれども、「自由な人」に遇つて、なぜか、「世において自在、自由な仏」そのような方に遇つて、なぜか人は感動するのです。

私は松原祐善先生にお会いした、この方はどう見てもおじいちゃんでした。僕は恥ずかしい話ですが、学生で、若かつたから「このおじいさん大丈夫だろうか」、よぼよぼしているし、言っていることはよくわからないし、こんなじいさん大丈夫かなと思つていたので、ところが感動しました。

この人は死ぬことから自由でした。自分が死ぬという前に立つてにこつと笑つて、そして自分自身からも自由でした。個人としていろんな思いがあつたとしても、「これは一切仏さんからいただいた世界ですから」と言つて全部引き受けて行つた。「この方は仏さん

だ」というふうに思うのは、具体的に仏さんの世界を生きた人を通してである、だからたとえじいさんでも、今のような感動を与えて亡くなつていかれた。どれだけ感動して泣いたか、涙が出たか。僕は何度生まれ変わつても忘れない、身が震えるほど感動しました。その時に「この人は仏さんだ」と思いました。体は私たちのような人間の姿をとつていても、先生が立っている根拠は仏さんの世界なのです。だから人を通して仏様の世界に触れるわけです。

第七華座観―無限なるものとの出遇い

ここがちやうどそれです。目連と阿難を従えて空から飛んで来て説法をしたお釈迦様を通して、韋提希は阿弥陀如来と観音と勢至を見たのです。そういうふうにししか表現できない。ここだけを読むと、「なんだこれ、おとぎ話みたいだ」と思うかもしれないが、そういうことでしょう、だから初めて韋提希が苦悩の塊、有限なるものが有限なるものになりきつて無限なるものに遇つた。その時に耆闍掘山から出てきたお釈迦様を通して「私は阿弥陀に遇つた」と叫んでいるのです。そこが第七華座観です。

その時に韋提希が感動して言うのです。

「世尊、お釈迦様よ、私は今、あなたの仏力によるが故に無量寿仏及び二菩薩を見たまつたことを得つ」私は、今、お釈迦様の説法・仏力、仏の説法によつて阿弥陀如来と二人の菩薩を見た、と。そうですね、その通りですね。生きたお釈迦様が説法をしたのですから、その説法によつて、この説法をしているお釈迦様は阿弥陀だと拝んだわけです。

ところが続いて、韋提希が「私はいいのです、お釈迦様が生きてくる時に、お釈迦様に会えて、お釈迦様の口から説法を聞いたのですから、ただお釈迦様のいなくなつた未来の衆生はいかにして無量

寿仏および二菩薩を觀たてまつるべき」と問う。

分かりますね、「未來の衆生」とは私たちのことです。「私たちのように仏滅後何年、お釈迦様がなくなつたときに、阿弥陀さんに遇いたい。阿弥陀さんの救いが欲しい、というものはどうしたらいいのか」と、わざわざ韋提希が聞いているのです。

蓮華―法蔵菩薩の本願力の所成

そうしたらその韋提希に対して「かの仏を觀んと欲わば當に想念を起こすべし」、

もし阿弥陀仏を觀たいと想うのならば、「七宝の地の上において蓮華の想を作せ」、その人は浄土の蓮華を觀なさい。仏壇の阿弥陀さんの像の足元、阿弥陀さんは蓮華の上に立っている、あれを見なさい、とお釈迦様は説くのです。「なんで、蓮華なのか」と思ふかもしれないが、一〇二ページ、さつき言った「蓮華」というのは何か、というのがここに説明されています。

「かくのごとき妙華は、これ本、法蔵比丘の願力の所成なり」

あの「蓮華」というのは、『維摩經』には「高原の陸地には咲かない、汚泥の湿地に咲く」私たちのような凡夫を捨てない。凡夫の煩惱の泥田の中から蓮華は咲くのです。だから、その蓮華を見なさい。しかもその蓮華は、法蔵菩薩の本願力によって成り立っている。わかりますね。

『觀無量壽經』には「念仏しなさい」とは説いていますが、阿弥陀の本願はどこにも説かれていません。だからこの『觀無量壽經』に「蓮華を觀なさい」ということは、お釈迦様ご自身が『大經』の本願の教えを聞きなさい、こう指示していることです。わかりますね。

だから『大經』の本願の教えは四十八説かれていますけれども、まず、私たちは阿弥陀なんか信じない、あるのは自分、そして欲、そん

なものの世界しか私たちは用事がない。そういう人をどうして救うか。「欲を起こすとこうなるよ」というのは三毒五惡段にちゃんと説かれていて。

今、いろんな問題があるでしょう。香港は香港で無茶苦茶になっているし、アメリカはアメリカでああいう問題が起こっている。それはそうなるよ、それがどうして分らないのか、それが本願の教えとともに『大經』の中にちゃんと書かれている。

お釈迦様は、生きている時に、「欲を超える世界こそが救いになる、どのようにして欲を超えた世界に生まれていくか」ということを韋提希に説いたのです。そうしないと韋提希は救われなかつたでしょう。

お釈迦様は、修行もできないし能力もない、自分の事ばかり主張して何か起ると自己保身しかない、いつも區別して自分を立てて、人に文句を言い、人を貶めていく、そういう差別根性しかもつていない人間を、どうやって、そういう世界を越えさせていくか、を説かれた。

超えるためには、まずそれをやれ、尽くせ。いくら「超える」と言つても無理だ、やつて傷つきなさい。それが第十九願です。人事を尽くして力いっぱいやつてごらん。もうこれ以上言わなくてもいいでしょう。ボロボロになつた死にそうになるまでやりなさいと言ふのです。

そんな中にどこに救いがあるか。これを教えて初めて人間を超えたものに遇うのです。そこに欲望とか比べるということを超えた、私たちが求めていた世界がある。初めて決定されるのです。

大経下巻―真仮八願の成就が説かれる

その道筋が四十八の本願にちゃんと説かれていきます。その本願が私たちのところに実現する、これを「本願成就」と言います。

上巻に説かれている自力の願が身を貫いて「いずれの行も及び難き身」ということを教えてくれた。それと同時に先生を通して、大きな仏さんの無量の世界に触れ、開放される。第十八願 至心信樂の願、他力の願です。それを「本願の成就」と言います。

もう少し皆さんがよくわかる言葉で言うのと、法然上人の教えに遇って「いずれの行も及びがたき身なればいずれも地獄は一定住かずかし」と頭が下がった。「その通りです、人間は自力によって地獄を作っているのです、だから私のようなものはどこにも救われる道はありません、南無阿弥陀仏」と初めて頭が下がった。それを『大経』では「本願の成就」と言います。

『大経』の下巻の方は、上巻に説いている浄土に「どうしたら往生できるか」ということが課題になっている。本願の成就文がずっと並べられています。その本願の成就文はこの真仮八願だけです。

お釈迦様も本願の成就文を説くときに四十八の成就文を説くべきだったと思います。だけでも要の^{かなひ}本願の成就文を説いています。ですから親鸞聖人が真仮八願を『教行信証』に選んだのは、親鸞聖人の勝手な恣意ではなくて、『大経』に説かれている本願の成就文によってこの八つの本願を選んだのです。お釈迦様の言うとおりに書いているのが『教行信証』です。ですからお釈迦様の経典によって、この八つの本願の成就文を選んだというふうに思ってください。いいですね、これで前半をおわりましょう。

《二席》

成就文は親鸞聖人の身に起こった事実

それでは、後半もうしばらくお話をさせていただきます。先ほど申し上げましたように親鸞聖人の『教行信証』は、四十八の本願があるにもかかわらず、真仮八願、八つの本願しか取り上げない。もしそれが親鸞の個人的な恣意であるなら、やはり『教行信証』も親鸞聖人の個人的な書物ということになります。ところがそうではなくて、『大経』に、特に下巻を中心にして八つの本願の成就文が掲げられているわけです。ですから親鸞聖人の本願の読み方は、成就文の方から読んでいくのです。

親鸞聖人は法然上人に遇って、なんでもか知らぬが五体投地している。これまで自力で生きてきたことがどれだけ愚かであったか、とてもでないけど自力で生きてきたことでは間に合わない、ということを知らされて、第十八願本願の世界に救われていった。自力から他力へという体験をもって救われていったわけです。

成就文というのは、親鸞聖人が法然上人にお会いし、南無阿弥陀仏と頭が下がった体験の意味を説いている。

経典から言えば『大経』です。『大経』のお釈迦様の教えに直接遇うわけにいかない、だから、お釈迦様にかわった法然聖人が、お釈迦様の『大経』の意味をとって「ただ念仏して、弥陀の本願に助けられなさい」と教えてくださったのです。それが諸仏称名、第十七願の意味です。

親鸞聖人は法然上人の教えに遇って五体投地し、「いずれの行も及び難き身、自力は無効です、南無阿弥陀仏」と応えた。その時に、今まで阿弥陀よりも私の方を信じて来たけれども、「私なんて結局地獄

を作っている本だ」と知らされた。初めて仏様の大きな他力の世界を仰ぐことができた。これが第十八願の意味です。

分別というものを超えて、赤い色は赤い色のように、白い色は白い色のように、青は青、黄色は黄色に、浄土の蓮の華のように、青が黄色をうらやんだり、白が赤をさげすんだり、そういう分別の破られた世界なのだから、初めて本当の意味の浄土の平等、必至滅度の願、必ず仏さんの悟りに行く身になった。

成就文というのは、全部、南無阿弥陀仏に帰した時に親鸞聖人の身に起こっていることを、經典には本願の成就として説いているのです。

わかりますね、そこが大事なのです。観念の仏教ではないのです。四十八の本願が本當にわかるのはお釈迦様一人です。説いているお釈迦様しかわからないのです。

後から偉い学者がいつぱい出てきて、ここからここまでは浄土の願だとか、ここからここまでは衆生の願だとか分類して、わかりやすく言っているけれども、それは人間が勝手に思っただけで、お釈迦さんが本當にそんなつもりで説いたかどうか何もわかりません。そういうのを学問といいます、学問にはろくなものはないから迷わされない方がいいです。つまらんことで金がとれる。ほんとそうです。

言っていることはわかりますね、親鸞聖人はうそをつかない。自分が南無阿弥陀仏と頭を下げたその身にそなわけることを、本願の成就として説いているのが『大經』です。だから南無阿弥陀仏に帰依したという体験を持てば成就文は凡夫でもわかる。

親鸞聖人の方法論 下巻成就文から本願を読む

ところが四十八の本願は、それをたくさん開いているから、多分お釈迦様にはお釈迦様なりに知らせたい意味があったのだと思う。読んだだけでは訳が分からん。浄土莊嚴、雲がたなびいて 網がかかって、真珠がたれさがって、本願の中に説かれている。それはなにかを象徴してそうおっしゃっているでしょう。だけど僕らは凡夫だからわからない。直接的に「ほー真珠があるのか。浄土に行ったらもうかるかもしれない」そんなことしかわからない。

浄土には蓮の花しかない。だから浄土に行っても楽しいことはないよ、食べるものはレンコンしかない。だから本願の方は本当は、凡夫には意味はわかりません。お釈迦様の真意はわかりません。直接お釈迦様にお逢いして聞くのなら別ですが。

だからインドの世親菩薩でも、四十八の本願について四十八の成就文を説くべきなのです。ところがあの世親菩薩でも二十九種類しか説いていないのです。後はわからなかつたのでしよう。

親鸞聖人はもつと少ない八つです。それはなぜかという『大經』に説かれているからです。そして『大經』に説かれている言葉は、法然に会ったときに身に覚えのあることばかりだから、その本願の成就文なら親鸞はわかつたのです。そこは大事。

『大經』の講義をするときに四十八願の講義もあります、あんなものは親鸞聖人の方法論とは違います。親鸞聖人の方法論は、下巻成就文から本願を読んでいるのです。だから八つしかあげていないのです。親鸞聖人の方法論でない方法論で読むのなら、親鸞聖人よりも偉いということになります。お釈迦様に匹敵すると思えます。「ふざけるな」と私の先生は言っています。

松原祐善先生は「無量寿経に聞く(上巻)」という本を書いて四十願を説明しているのです。先生に「上巻を書いているのに下巻を書かなくてはいけないではないですか、下巻をみんなが待ってます」と言ったら怒られました。「馬鹿が、おれは本願の成就文に立つて四十八の本願の中身を解説した。私の立つている立脚地だから下巻は書かなくていい」と言われた。そういう言葉で、親鸞の方法論はどういうことかということをお教えされている。

だから僕は遺言を守ってずっと書かなかった。ところがなんかわからんが四十八願を講義する人たちが一杯いるでしょう。あんなのを見るとイライラする。「嘘をつくな」と思う。だから、あれは親鸞聖人の『教行信証』の方法論ではない方法論で『大経』を解説している。そういうのは自分が親鸞聖人より偉いということです。そういうことが分からなくなっているから、下巻の方を書こうと思ってる書いたのが、あの『無量寿経下巻』です。あれもお読みになつて下さい。

ここでは詳しく説明する時間がないのです。成就文一つ一つ当たっていく時間がないのです。だからあの本を読んでいただくと思ふかと思ふ思います。ここで確認しておきたいことは、くどいようですが親鸞聖人は成就文に立つて、成就文から本願を選んできたということです。成就文から読んでいった、ということ。それは法然に遇った、凡夫であつても救われた、その身に覚えがある本願の成就文だけを挙げています。それが親鸞の実践の仏教のまずはじめです。

五比丘―最初の対告衆

今日は「本願」ということをテーマにお話をしていますから、無量寿経の上巻の方からざっと見てみましょう。どんなふうに本願が説

かれていくか、まず、大切なところを申し上げていきましょうか。

まず、一ページのところ、これから『大経』が説かれて行きますけれども、「対告衆」というのはわかりますか、『大経』を説く相手です。この相手の代表は阿難です。これはこれまでもお話をしました。今まであまり『大経』の対告衆を問題にしていなかったのですが、まず一ページのところに、

「一切の大聖、神通すでに達せり。その名をば尊者了本願・尊者正願・尊者正語・尊者大号・尊者仁賢」、そういう人たちが二千人ほど、この『大経』を聞いているのです。ここから始まります。今、私が読んだ五人の人は五比丘です。だからもつとも古いお釈迦様の弟子です。五比丘というのを知っていますか。

インドに行った人は行つたと思いますが、お釈迦様が金剛法座で悟りを覚えるのです。それまで一緒に苦行をしていた五人の比丘たちは「あいつはスジャータの乳がゆを飲んだ、だから墮落しやつだ。あんなやつとはもう縁を切る」と言つて、ベナレスのサルナートというところに行つてしまふのです。それでお釈迦様が悟りを覚つて、そこで説法をしようと思うのですが、(ここが大切です)、お釈迦様の説法は一切衆生を救うのですから、だれに説いても分からないといけないのです。そうするとそれはブツダガヤで説けばよかつたのです。

ところがブツダガヤは、僕は初めて行つた時にびっくりした。ブツダガヤは小さな村で、小さい子は学校にも行っていないのです。だからいろんな面白いことがあつた。でかいバナナを買つて、これではかいバナナなので、小さいバナナが欲しいと思つたので、「この大きなバナナと小さいのと変えてくれるか」というと、「うん」と言つて、ぼつと代えてくれて、小さいのをちよつとだけくれたのです。なんかものすごく損をした気持ちでした。計算がうまくできな

いから代えてくれるだけ。ちゃんと計算をしてくれたらおもしろいけど、バナナを置いて、一ルピー、二ルピー、三ルピーと置いて、こつちに五ルピーおいて、二ルピーのバナナと三ルピーのバナナと交換するのです。計算をするのではないのです、交換をするのです。それでこの人たちは頭の中で計算できないのだと思った。だからお釈迦様が説かなかったかどうかはわからない。

仏法を聞くには準備が必要

仏法を聞くためには、だれでも聞けるといっているのではないのです。仏法を聞く準備がいます。そのために僕らは勉強しているのです。勉強して分かるのなら法然の方が先に分かっているのです。勉強してもわからない。勉強してもわからないけれども、何のために勉強するのかという本物に出会ったときに、すれ違わないために勉強しているのです。だから、お釈迦様はその場で説かず三三百キロくらいあるサルナートに歩いて行つたのです。途中である人に会うのです。仏伝によれば、そうしたらお釈迦様は同じことを言うのです。「われは如来である」というのです。そうするとその人は「ふん」と言つてすれちがつていく、ちよつとぼくらのようです。

本物に会つてもよくわからない。それはこちらに法を聞く準備がないからです。それには勉強が必要です。知らない言葉を知ること必要です。そしてそのことが私たちが生きるといふことにどんな意味を持つているかということをよく考えて、そして本当に私たちが求めているものは何かをよく考える、求道心、そこまでいった人でないと仏法は聞けない。それをちゃんと仏伝があらわしています。

尊者了本際

お釈迦様がサルマートまで行くと、五比丘たちは「あいつは乳がゆをもらつて墮落した奴だから、あんな奴とは口をきかない」と相談をしていたのです。そこに、お釈迦様は颯爽と行くのです。そうしたら約束していたのに、一人が立ち上がつてお釈迦様の衣をとつて、一人は立つて座を整えて「どうぞ」と言つた。一人はびっくりしたのでしよう「おおゴータマ」と叫ぶのです。そうしたら、お釈迦様は「昔の名前で呼ぶな、我を如来と呼べ」と言つた、かつこいいでしよう。「如来と呼べ」というのです。五比丘はきよんとしているのです。それで説法になる。こういうことです。

そうしたら感動して「そうだ、その通りだ」と叫ぶのです。そして初めて「南無仏」と頭を下げるのです。「そうだ。その通りだ」と叫んだ人が尊者了本際です。本際を了とした。本当のことが分かつた。漢文では了本際、これは今言つた「そうだ、その通りだ」と叫んだのが名前になった。だから初めてこの世に仏法僧の三つが誕生したのです。

凡夫まで包んだ対告衆

この五比丘たちを筆頭にして、小乗仏教のお釈迦様の直弟子たちの名前が出てきますが、最後に阿難が出てきます。

この『大経』には今、五つの異訳の経典が残っています。私たちが拝読しているのは康僧鎧訳の『大経』です。ところがその他にも古い経典で行くと『大阿弥陀経』『平等覚経』それに私たちの『大経』これが古い訳です。それに対して『無量寿如来会』それから『無量寿莊嚴経』これが新しいものです。五つ訳が残っているのです。

この訳の中で、同じところに、阿難の下に、まだ優婆塞・優婆夷という在家の仏者、普通の生活者、その人たちの名前があがっています。ですからここは小乗仏教の場、阿羅漢たちと、もう少し広げて

言うのと、凡夫まで包んだ対告衆が説かれていることになります。その代表者として阿難がお釈迦様の教えを聞いている。これが『大経』の特徴です。わかりますね、凡夫まで包んでいるということです。

大乘の菩薩も対告衆

普通は、それで何も言わないのですが、次のページを開けてください。ここに『大経』も「もろもろの菩薩」とある。今申し上げたように、お釈迦様の直接の弟子たちと同時に、凡夫まで包んだそういう人たちと同時に、大乘の菩薩も対告衆であると書いてある。そして「普賢菩薩・妙徳菩薩」（妙徳菩薩というのは文殊菩薩のことです）それから「慈氏菩薩」（これは弥勒菩薩です）そんなふうに、ここに大乘仏教の菩薩たちも『大経』の対告衆になっているということを知っておいてください。

なぜかと申しますと、世親菩薩（天親菩薩）がインドで『浄土論願生偈』を書いた、あれは『大経』の菩薩として書いたのです。だから『浄土論』を読むと、表向きは菩薩道の論書として書かれています。親鸞聖人の『教行信証』は『大経』の本願の通りに書いてありますから、『教行信証』は『大経』の論述です。これもまたこれから先、少しずつ勉強していく中で申しあげます。ただ世親菩薩と立場が違うのは末法の凡夫として書いてある。阿難尊者と同じ立場で『大経』の論述を書いたのが『教行信証』です。菩薩の立場で書いたのが世親菩薩の論述ということになります。

『大経』は凡夫と菩薩の救いが並説

なぜかという『大経』は菩薩にも救いがあり、凡夫にも救いが説かれています。この二つが説かれているのです。いいですね、皆さんが一番よく知っている第十八願の成就文を知っていますか。

聖典の四十四ページ、そこに本願の成就文が三つでてきます。

せつかくですから申し上げましょうか

「それ衆生ありて、彼の国に生ずれば、みなことごとく正定聚に住す。所処は何ん、かの仏国の中には、もろもろの邪聚および不定聚なければなり」

そこまでにひとつ、それは第十一願 必至滅度の願の成就文です。

その次

「十方恒沙諸仏如来、みな共に無量寿仏の威神功徳の不可思議なることを賛嘆したまう」これが第十七願の成就文です。

最後に

「あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歓喜せんことを、乃至一念せん。至心に回向したまえり、かの国に生まれんと願ずれば、すなわち往生を得て不退転に住す。」

ここまですが第十八願の成就文です。それだけでも教・行・信・証あるでしょう。だから『大経』の一番最初のところに教・行・信・証の成就文がちゃんと配置されています。

今、私が申し上げたかったのは、（だれも言っていないのですが）、その第十八願のところ

「至心に回向したまえり、かの国に生まれんと願ずれば、すなわち往生を得て」

そこまですべて凡夫の救いは完結しているはずですが。浄土に生まれればそれで凡夫は救われるのですから。浄土に生まれたらそれでいいのです。ところが、その後「すなわち往生を得て不退転に住す」と書いてある。この「不退転」というのは大乘の菩薩道の言葉です。だから、そこには凡夫の往生の救いと大乘の菩薩の不退転とが、いっしょに並べて説かれているということになります。すごいでしょ

う。

そういうところに着眼して曇鸞の『浄土論註』が書かれています。凡夫の救いと大乘の菩薩道とどういう関係があるのか、というのが曇鸞の『論註』の最大の課題と言ってもいいのです。

しかし、私たちが最も大切にしている第十八願でも、凡夫の往生と菩薩の悟りとが同時に並べて説かれている、というところに『大経』のすばらしさがあるということを知っておいてください。そんなふうに『大経』は凡夫を包んだグループと、大乘菩薩を包んだグループと、ともに包んで『大経』が書かれている。『大経』という経典はすごい経典だと思います。

阿難と釈尊の出会いを三つの成就文で表す

教の巻で釈尊と阿難の出会いを改めて考えましょう。おもしろいよ、けども今申し上げたように『大経』の救いは阿難がお釈迦様に出会ったところに実現したのです。だから、上巻の「阿難とお釈迦様の出会い」は、下巻で言えば、「諸仏称名の願」、「至心信樂の願」、「必至滅度の願」、この三つの成就文としてあらわされていると思います。わかりますね。

「阿難よく聞きなさい。あなたは私に会って、この世にない無限なるものに遇った。分別を超えた、比べるとか、自分というもので超えて、無量寿、無量光という無限なるものに遇った」

それが最初の第十一の必至滅度の願「それ衆生ありて、彼の国に生まるればことごとく正定の聚に住す」の成就です。

必ず、仏になるものになる。「仏になる」というのは分かりにくいかな。必ず私が私でよかった。比べるということを超えて、(優越感とか劣等感というものみんな持っているでしょう) 私がこんな馬鹿な生き方をしてきたのは、仏さんに遇うためであった、となる。だ

から今、仏さんに遇ってみれば、「ああよかった、私は私でよかった。だれにも比べる必要がない。そういうものに私はなりたかったのです」

これから仏になっていく道を歩む、

それがまず十一願の成就文です。

そして、十方恒沙の諸仏、お釈迦様一人ではない、ガンジス河の砂の数ほどの先輩たちが、みな共に無量寿仏の威神功德の不可思議なることを賛嘆している。

皆さんも、お父さんお母さん、おじいちゃんおばあちゃん、まわりのご住職たち、たくさんの人たちに育てられたからここに来ているのです。能力があるからとは違うと思います、真宗のうちに生まれたからだと思う。

僕もそうです、貧しかったけれども寺に生まれたからです。それがなかったら、僕は仏教なんか勉強しなかったと思う。そうやって自分が置かれたところに、それでもぎ、田舎のおばあちゃんたちが、苦しい中で「ボンちゃん、大きになったら親鸞聖人の教えを聞くものになりなさい」と言って、お米を一握り持つてきてくれた。私はそれを食べて育てられた。そういう人たちの米一握りよりもっと大きなものを貰ったと僕は思う。なんか、ばあちゃんたちが命がけで生きてくるものが親鸞聖人の教えだと、子供だけど分かったのです。自分のうちの子供にやらないカン口飴を一つ貰った。前にも言ったと思うが、うれしかった。袋で持っているのを知っていたから、毎日行つて、ばあちゃんから、無くなるまでカン口飴を貰った。この味は忘れられないくらいにうれしかった。このカン口飴を通して、ばあちゃんが一生懸命生きようとしていたばあちゃんの世界までしみ込んだのです。

そうやって、自分の思いを超えたものが、私たちを育てていく

れている。十方恒沙の諸仏がみな共に無量寿仏の威神功德の不可思議なることを賛嘆している。みんな、阿弥陀如来の世界が一番なのだ、と言って念仏を称えていた、そういう人たちの後ろから押す力によって、私は、今、はじめて念仏の教えに遇ったのです。

漢文で難しいように思いますが、成就文でいうと、そんな難しいことはない、そう言っているのです。

そして諸仏の護持養育によって、私のような自力しかないものが、仏様を信じるということが起こった、「不思議なことだ、南無阿弥陀仏」と言っている。

これが第十八願です。

それがお釈迦様の阿難との出会い、阿難におこっているのです。だから下巻になると「阿難よく聴きなさい。あなたは、僕に遇って感動したでしょう。無量の世界に解放されたいと叫んだでしょう」これは第十一願が成就したということです。「よく知っておきなさい」と言っているのが下巻の成就文です。

阿難とお釈迦様との出会いは、教の巻でまた詳しくお話ししますので、今日は省略します。

世自在王仏に遇う

ところがこの阿難とお釈迦様との出会いが終わると「阿難よく聴きなさい」と「あなたが修行もせず、凡夫のまま、そして能力も資質も問わないで、私の教えによって無限なるものに遇った、そんな馬鹿なことは本当はないのですが、なぜそういうことが起こったか、それを今から説くからよく聞いておきなさい」と言っていて説きだされるのが『大経』の教えです。その時に

「乃往過去久遠無量不可思議無央数劫に、錠光如来、世に興出し

て、無量の衆生を教化し度脱して」というふうには、この錠光如来からずつと五十三の仏さんが説かれます。ここは過去五十三仏といわれるところですが。つまり阿弥陀如来の悟りは、単に阿弥陀如来一人のものではない、永遠の昔から阿弥陀の悟りはあったのです。お釈迦様が出ようが出るまいが、永遠の昔からある阿弥陀の悟りは真実なのです。今もあなたたちは気づいていないと思うけれども、阿弥陀の世界に生かされているのです。そういう意味で過去五十三仏が説かれていきます。そしてこの五十三仏の最後に、先ほど申しあげましたように世自在王仏という仏様が説かれます。そしてその仏様に

「その時に次に仏ましましき、世自在王仏、如来・応供・等正覚・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・仏・世尊」これは仏の十号と言われます。仏様にはこの十の名前があるのです。だからこの世自在王仏にこの十の名前があります。

「時に、国王ましましき」、世自在王仏の説法を聞いて、心に喜びを抱いて、「無上正真道の意を発し」、阿難よく聴きなさいよ、世自在王仏という仏様に国王が遇って、国王が無上正真道の意を発して、「国を棄て、王をすてて、行じて沙門となり、号して法蔵といいき」

国王が一人の沙門。修行僧になって法蔵菩薩というものになったのですよ、というところから如来の本願の教えが説き出されていくことになります。たいへん象徴的です。私たちは中途半端に、中流階級でしょうか、中途半端に金を持っていますから、国王くらいになるともういいと思っ捨て捨てるのかもしれないが、どうも捨てられませんね。

けども、やはり世自在王仏を見たのです。皆さんご存知のようにお釈迦様が出家するときもそうでしょう。東の門から出て行って病人に遇う。生老病死を見て、そして最後に北の門を出たときに沙門の遇うのです。

(皆さんはインドで沙門を見たことがありますか。乞食か沙門がよくわかりません。汚い。僕は一人で رفتった時に、お釈迦様が修行された前正覚山というところに行つたのです)

修行者というのは髪を切つたらだめなのだそうです。だからみんな髪を伸ばしています。邪魔になるから束ねて、スピーデーワンダーのように三つ編みにして、ずつと垂らしているのです。垂らしても足まで来るから、頭の上で丸めて木で止めているのです。お釈迦様と同じで、裸で石の上で瞑想していました。ああいうのを見ると、お釈迦様もあのようにして修行されたのだとよくわかりました。すごいものだと思います。

北の門から出てさつそうと歩いている沙門を見たのです。病氣になり、老人になり、そして死んでいく、これでは今の僕らみたいに何の望みもないです。だからふさぎこんで何のために生まれてきたのだと悩んでいたのです。お釈迦様は多感な人だったらしく、鷹がきて他の鳥を食べようとするのを見て心を痛めた。何のための人は生まれた来たのかと思つている時に、北の門から出たときに、さつそうと歩いている沙門を見たのです。まっすぐ前を見て、何も持つていない、丸裸。だけど、お釈迦様はそれを見て感動するのです。そして出家するのです。

ちようど法蔵菩薩のところと一緒です。国王の位を棄てて、「世に自在なるもの」というのはいい名前だと思いませんか。皆さんはこれまで生きてきて、いろんな方と出会つてこられたと思えますが、やはり心に残つた出会いをよく考えると、自由とか平等とか、何かそういうものに触れたときに、心に残つていないのですか。

黒柳徹子さんの書いた「窓ぎわのトットちゃん」、あれは黒柳さんが小さいころに感動したことをいっぱい書いています。ところ

があれを読むとよくわかる。やはり自由であるとか、平等であるとか、子供の自分をちゃんと一人の人間として認めてくれたとか、そういう感動したことを全部書いているから、あれは世界共通なのです。あれでトットちゃん御殿が建つのです。だれかそういうのを書きませんか。

阿部謹也先生

私が尊敬する先生のひとりに阿部謹也という先生がおられます。今、一ツ橋大学の名誉教授です。僕より少し先輩です。西洋の歴史を専攻した先生で、何度かお逢いして、大谷大学にも呼んだことがあるのですが、なかなか立派な先生です。阿部謹也先生の筑摩書房の児童文学書の中に「自分のなかに歴史をよむ」という本があります。それを一回読んでみてください。中学生でも読める。学問とは何かをやさしい言葉で書いた本と思つたらいいです。

その本の中に阿部謹也先生が大学の二年生の時に、三年生からゼミを専攻するでしょう、自分はどのゼミに行こうかと悩んだ。

その当時一ツ橋大学に、当時有名な上原専禄という先生がいた。みなさんもうご存知ないかもしれませんが、大学紛争が盛んな時に、大学がもめて「学問とは何か」ということを学生と教員が喧々諤々議論をして、その頃、ちよつと言葉が適当でないかもしれないですが、つまらない先生は辞めていったのです。辞めさせられたのです。それでも最後まで残つたのが上原専禄先生です。そして学生連中に「学問とはこういうものだ」と最後まで教えていった先生なのです。

有名な人で、当時はテレビにも出たりしていました。私もよく知つていますが、阿部謹也先生は大学二年の時に、その先生のゼミに入りたいと言つて、当時は携帯がありませんから、はがきを書いて「何月何日、先生のゼミに入れていただきたい。阿部と申しま

す。よろしくお願いします」というのを出したら、はがきが来て「何月何日の何時に私の家に来なさい」というのが来た。それで、喜び勇んで先生の家に行くのです。そうしたら先生が玄関に出てきた。「あー、テレビで見た先生」というようなものです。

そしたらなんと「阿部さんですか」とものすごく丁寧で謙虚だったそうです。そして「大変失礼をしました、約束のお時間なのですが、今、岩波の日本の歴史の編集会議をやっていて、それが伸びてしまつて、ちよつと待つていただけますか」とえらいていねいであつたそうです。こんな偉い先生が、こんな丁寧にと思つて緊張して「いくらでも待ちます」と言つたそうです。

先生が「そうですか、どうぞ」と言うので付いて行つたら、なんと偉い先生が二十人くらい車座になつている。そうしたら先生が「この子が阿部君と言つて、今、二回生だけど、私のゼミに入りたいといつて今日尋ねてきたのです、よろしく。阿部さん、どうぞ、その座つてください」と紹介してくれたので、自分も座つた。

阿部君は自分は関係ないと思つて、周囲を見回して「いっぱい本があるな」と思つて感心していたら、向こう方で、じいさんが立ち上がつて、「私は東京工業大学の名誉教授の・・・であります。私は日本の歴史で古代を担当させていただいております。どうぞよろしくお願ひします」と自己紹介をされたのです。「えー、俺は関係ない」と思つていたら、次から次に立ち上がつて、全部の方が挨拶をされたのだそうです。ものすごく感動して、「その時に私は学者になりたいと道が決まりました」と書いておられます。

いいでしょう、そうなのです。学者というのは偉そうにしていると思つていただけれども、全部がものすごく謙虚で、そして対等に付き合つてくれる。途中でポーとしていたら「阿部さん、あなたのような若い方は、どういうように思われますか」とふられたのだそうです。

す。「うわーと思つて一生懸命に答えたけれども、何を答えたか今は覚えていない」と『自分の中に歴史をよむ』の中に書いておられます。

そんなふうには「平等」というはだれでも知つていのです。でも「平等」を身で生きている人に会つて人は感動するのです。そして自分もそうなりたいたいと思う。「西洋史を勉強しようと、自分の道はその時に決まつた」と書いてありました。そういうものだと思います。

三つの本願と本願成就

せちがらいようで生きていますけれども、自分をも超えて、自分の死を超えて生きている人、そういう人に遇つて無上正真道をおこした。そして国王を棄てた。そこから始まるわけです。ここから一切の衆生を救いたいという本願を建てていくのですが、四十八の本願がずつと説かれ、二十四ページのところまで終わります。

「仏、阿難に告げたまわく、」

お釈迦様が阿難に、こう言つた。

「その時に、法蔵菩薩は、この願を説き終つて頌を説きて曰く」と言つて、今日みなさんが勤行した重誓偈あるいは三誓偈、なんで三誓偈といわれるかというところ、三つの誓いが述べられているから、今四十八説いてきたのに、いきなりなんの説明もなく三つ説く。だから四十八に重ねて三つ説くので「重誓偈」と言われたり、三つもう一回誓われるから「三誓偈」と言われたりするのです。

その三つの誓い。

まず「**我、超世の願を建つ**」

一番最初に「超世」世を超える。四十八の本願が説かれて、この三つが説かれるから、簡単にいうとこの四十八の本願を三つにまとめ

たと考えてみてください。そうすると一切凡夫を救う時に、金がな
いと困っている人に金をやるというのではなくて、この世を超えな
さい、自分からも超えなさい、先ず「超世」。これはすべての仏教が
持っている「願」ですから「総願」と言います。

次に「我、無量功において大施主となりて、普くもろもろの貧苦を
すくわずば、誓う、正覚をならじ」

貧苦というは貧しく苦しむもの、「凡夫の救い」です。これは他の
仏様にはありません。阿弥陀如来しかもっていない願いですから
「別願」になります。

最後に「我、仏道を成るに至りて、名声、十方に超えん」
これは「名号による救い」です。

四十八の本願と言っても、この三つの本願に集約される。「超世」
「凡夫の救い」「名号による救い」、この後ろの二つは阿弥陀如来にし
かない。ですから「別願」です。この三つが『大経』に説かれる真宗
大綱です。お釈迦様が説く真宗大綱です。「大綱」というのはわかり
ますか、地引綱があるでしょう。あの地引綱を引くときに一番大き
な綱があります。あれを大綱と言うのです。だからあれが切れたら
綱になりません。だからこのどれが欠けても真宗になりません。だ
から親鸞聖人は、必ず真宗大綱を説くときに、この三つをはずさな
いで『教行信証』にちゃんと説いています。

元に戻ります。ですから、お釈迦様は本願成就文を説くときに、
四十八の本願の成就文を説くべきだったのでしよう。だけでもこの
三つに四十八の本願をまとめています。

「名号」は第十七願 諸仏称名の願の成就

「凡夫」は信心による凡夫の救い、十八願 至心信樂の願の成就

「超世」は世を超える、仏になる、第十一願 必至滅度の願の成就

だから『大経』の最初に、

超世 第十一願 必至滅度の願の成就

凡夫 第十八願 至心信樂の願の成就、これが凡夫の救い、

名号 第十七願、諸仏称名の願の成就、これが名号による救い、

おそらく四十八の本願を三つにまとめたのですから、その三つの
本願の成就文によって四十八願を代表して説かれたのだと思いま
す。

いいですか、言っていること分かりますか。その辺のところは最
初に申し上げた本にもきちつと書いています。また確認して頂くと
忘れなくなりますから、何度も何度も読む。お互いにもう歳ですか
ら、すぐ忘れるのです。その場合は繰り返しかしようがない。す
ると身についてくるのです。そこまで読むしかしようがないので
す。

これは間違いない、『大経』の通り言っているのですから。

ちよつと時間が過ぎたかも知れませんが、今日はこれで終わら
していただきます。もうちよつと申し上げたいことがあったので
すが、

《質疑》

(質問1)

韋提希は、「自分は今お釈迦様にじかに会えるけど、私の後の人は

どうするのですか」とたずねたら、「かくのごときの妙華は、これ本法蔵比丘の願力の所成り」と言われたのですが、「蓮の華を見る」とはどういうことでしょうか。

(先生) その前に戻ってみてください「未来の衆生はどうしたらいいですか、」でしょう。そうしたお釈迦様が「蓮華を見なさい」という。蓮華というのは何のことかよくわからないから、「こういうことが蓮華なのです」というのが次のページでお釈迦様は説明している。

「蓮華」というのは、単なる蓮華の華というよりも、法蔵菩薩の四十八願によって建てられた華なのです。法蔵菩薩の四十八願は凡夫の泥田の中に足をつけて、凡夫を救うために建てられた本願だから、法蔵菩薩の願を蓮華に譬えているのです。だから「蓮華を見なさい」ということは、「後の人は『大経』の本願の教えを聞きなさい」ということです。それを『観経』の中でお釈迦様が指示をしている、そう言うふうに申し上げたかったです。

『観経』には本願と書いてありませんが、私たちの世のように五濁の無仏の世に生きるもの、それでも阿弥陀に世界に救われたいと思う人は「本願の教えをよく聴きなさい」ということになると思います。

(質問2)

先生のお話を伺いますと、(法蔵菩薩は) 私たちの救いのために浄土を建立された、ということですか。ところが、私たちは「信心を頂いたら、浄土に往生したら救われる」と勝手に考えるのですが、私たちが思っている浄土は、先生のお話では一般的に言われる「天国」、仏教でいう「天」であるということですか。お寺さんとか、そういう一般的な関係の人は「浄土に生まれたら救いなのだ」と言うのですが、そ

れを教えられた私たちは、「善いことをしたから天国に行くのだ」と勝手に決めて、「天を望む、天国に行くことが浄土に生まれることだ」と勘違いしていると思うのです。

先生のお話を聞いていたら、「浄土」がちよくちよく出て来るのですが、「浄土というのは何か」というのを、私たちの勘違いを解く意味で、少しお話を頂けないでしょうか。

(先生) 難しい問題ですね。なにを聞きたいのかも一つよくわかりませんが、『観経』の通り言います。

『観経』では定善十三観が先に説かれています。つまり浄土を見なさいということ、浄土はこんな素晴らしい世界ですよ。日想観・太陽をみなさい、西の方を観なさい、浄土はこんな素晴らしいところですよ、静かで、涼しくて、そして水が流れていて、池があつて、蓮があつて素晴らしい世界ですよ、いうふうに説かれています。ですから私たちから言えば、憧れの世界になります。あるいは理想の世界になります。だれでも行きたいなというように説いています。

それは食べるものは何でもある、それでも繋がれても金の鎖です。から、食べ物でもなんでもあるし、言わなくてもわかるでしょう。ばあちゃんやんが寒いときに風呂に入つて、ため息ついて「あー極楽、極楽」という、私たちから言う理想の世界として説かれているのです。ところが『観経』は、その浄土に生まれるためには、定善十三観を説き終わりますと、この間お話をしました散善になります。そして散善のところでは、はつきりと韋提希に「今、浄土を説いたでしょう。こんな素晴らしい世界が浄土なのです。これあなたに渡します。」という。

すると、韋提希は「そうですか、いただきます」と言つて手を出したら、「おまえちよつとまで、お前その手をみてごらん真つ黒ではな

いですか、お前の手でつかんだら、浄土が汚れる。」と言って、浄土によつて、かえつてお前とは何者かということを教えている。

憧れて浄土に生まれたい、浄土に生まれたい、この世は嫌だと憧れるのですが、憧れているお前自身は何者であるか、かえつて浄土の清浄さが照らし出して、そして「わたしなんて、浄土に生まれるようなものではありません。」と言つてお手上げになる。その時に「浄土は、そこにある、」というふうに教えられる。

だから浄土の莊嚴を私たちが憧れるようにわざわざ説いて、けれども、そしてそれは自己とは何かということを担当に教えるために書いてあるのではないかと読んだのが善導大師です。

そういう意味でまずは浄土に生まれることを憧れさせて、そしてみなさん真宗を勉強し始めるとみんなそうです、浄土に生まれたいと、そして西の方から阿弥陀如来に救われたいと全部自分の外に阿弥陀も浄土も考えて、それはそうです、人間の頭というのは自分と他人を分けて考えるから、ところがこのわけて考える考え方に行き詰つてしまつて、最後にどうにもならなくなつて、初めて本来の意味の浄土を教えるという説き方になつていっているというのが『観経』です。

だから例えば暁烏敏という先生は、若いときから説法の名手でした、だから自分は若いときから『観経』の阿弥陀を説いてきた、『観経』の浄土を説いてきた。ところがある事件をきっかけにして、友達もみんななくなるし、自分ひとりぼっちになつて、そこから「神も仏もあるものか、今まで思い描いていた西の方に浄土ある、そういうのはうそじゃ」と、うわと泣きわめきながら大地に身を投げ出した、大地をたたいて泣くのです。

その時に大地の方から南無阿弥陀仏が沸き上がつてきた、「**体**は大地の意義です」と言つて、今まで思い描いてきたことが全部破れて

しまつた。はじめから浄土の中にあつた。というように本当の浄土に出会つた。みんなそんな道筋を通つて、『観経』から『大経』に移つていくのです。

曾我さんもそうですし、清沢さんもそうだし、親鸞さんもそうでした。

そんなふうに『観経』は方便の教えです。わかつてしまえば方便の教え、しかし方便の教えが大切なのです。それがなければ私たちはわからない。そういう関係になつていっているということを、初めから解説するのはいけないのです。

変なことを聞くから解説してしまいました、そんなふうな説き方になつていっているのです。そういうことを知つておいてください。

一言だけ、今言つたように『観経』は、私たちの外、西の方に浄土を説いたり、阿弥陀を説いたりするので、『大経』は、私たちの命の根源に浄土がある、命の根源から本願が呼び続けている。命の中に浄土と本願がある、と説く。それが『大経』です。そんなふうにご考えてください。南無阿弥陀仏

文責は編集者の田畑正久にあります。